



# 雨雲読神社



川崎ゆきお

今は住宅地で、何丁目何番地になっているが、昔は里山だった。その斜面に今も残っている神社がある。外からこの町に来た人には関係のない場所だが、三河は散歩中、それを発見した。

三河はこの町に住みだしてからしばらく経つが、こんな神社があるのを初めて知った。これは町内散策の楽しみの一つだ。思わぬものを見つけることで、楽しめる。

神社への入り口は分かりにくい枝道にあり、私有地もしくは私道、つまり人の家の庭先に入り込むようなものだ。この辺りだけは昔からの家がある。ただ、もう家はほとんど建て替えられ、住宅地の家並みとそれほど変わらない。

曲がりくねった路地、余地の向こう側に神社がぽつりとある。鳥居跡もある。

神社の名前は雨雲読神社。聞いたことがない。この神社とは別に、八幡様がある。農村時代の氏神様だろう。

「ようお参りで」

三河が社殿の中を覗いていると、後ろから声をかけられた。

「雨雲読神社って、何ですか」

「雨雲さんだよ」

「雨雲を読む。それは天気的神様ですか」

「さあ、それは分らん」

「月読ってのはありますねえ」

「わしは、よう分らんが」

「あなたはどなたですか」

「ここは、わしんところの地所じゃ」

「ああ、地主さんですか」

「ここは庭じゃ。ちょっと荒れておるがな」

「雲と関係する神様なんでしょうねえ」

「きっとそうなんだろうが、よう分らん」

「誰か、調べに来ませんでしたか」

「何度か来たことがあるが、よう分らんらしい」

「なるほど。謎の神社ですね」

「まあ、誰もお参りに来んから、なくてもいいようなものじゃ」

「はい、お邪魔しました」

老人は三村の帰る姿をじっと見ている。

三村が振り返ると、さっと横を向いた。

その後、三村はいろいろと調べたり、近くの人に聞いたが、誰もよく知らないらしい

。

地図で調べたが、神社のマークは付いていないし、神社名も気されていない。

世の中にはそういう神社もあるのだと思うしかない。そして三村は二度とそこには立ち入らなかった。

了